

東日本大震災・緊急消防援助隊派遣を終えて



【所属】 消防本部警防部

【階級】 消防司令

【名前】 山口 喜昭

緊急消防援助隊大阪府隊の救急部隊長として、岩手県大槌町に第6次派遣隊として派遣されることとなり、当組合の救助隊員・消防隊員・救急隊員12名と共にマイクロバスで24時間を超える長距離の移動となりました。現地に近づくにつれ、風景も北国らしくなりかけた岩手県内で、沿道から頭を深々と下げられ、手を合わせてくださる方々が居られ、私たちの使命と枚方市民や寝屋川市民から託された思いを伝え、被災者の方々に一刻も早く手を差し伸べたい気持ちで目頭が熱くなるのを覚えました。

被災地に着くと現実の様子は想像を絶し、筆舌に尽くしがたい状況で、このような場所で救急部隊長として救急隊21隊をまとめ上げ、被災地の方々に役立つ活動ができるか、泣きたいくらい不安で体から血の気が引くのを感じ、この場から逃げ出したい一心で「このまま大阪に帰らせてほしい」と思いましたが、第1次派遣の仲間も疲労困憊しており、そんな寝言は通用しません。そのあとの申し送りやアドバイスにより、自分を取り戻し、子供みたいなことを考えた自分を恥じ、自分に課せられた「被災者をひとりでも多く、早く救出し、救命すること」を思い出させていただきました。

実際の活動では、過酷な環境の中で1名の生存者の救出に至り、ご家族の方と再会していただくことができました。このような活動ができたことは、府下から参加されている多くの隊員が一丸となってなし得た結果と考え、より一層の励みとなりました。

第6次派遣隊の活動は長期化すると予測されたため、仲間のモチベーションを高い状態で維持することが必須と思い、救急部隊では、隊員一人ひとりの考えやアイデアを毎夜ミーティングで出し合い、議論しながら、活動指針を決定し、それに基づき活動しました。

その指針により実践したことは、「被災地において医療基盤の再構築を行う。」ということでした。具体的には、我々が活動した地域の基幹病院となる県立大槌病院では、

震災による被害のため、入院患者のほとんどの方が県立大槌高校に一時避難し治療を継続されておりましたが、日が経つにつれて治療を維持することが難しくなり、危機的状況であったことから一時避難されていた傷病者を県立釜石病院へ搬送することとしていました。しかし、その釜石病院ですら被災し病院機能を維持できない状況に至っていたため盛岡市内などの医療機関に分散する転院搬送を実践いたしました。その後、緊急消防援助隊が減隊されるにあたり、県災害対策本部に提言したことにより医療基盤を再構築する支援を継続する決定につながりました。

今回の震災で創意工夫して実践した方法については、今後高い確率での発生が予測されている「東南海・南海地震」など大規模地震による超広域的な災害に対する救急医療施策の再構築につながるものであると確信します。

被災地の一刻も早い復興を願い、今後もその過程を温かく見守っていきたいと思います。